ブラック・ナショナリズム再考

竹本友子

一

公民権法制定後三十数年を経て、合衆国の黒人の状況はどのように変わったのだろうか。法的差別は撤廃され、経済的向上によって中産階級が増加し、政治的にも多くのポストに進出するようになった。公民権法とそれを補足するアファーマティヴ・アクションの成果は否定できない。

しかしその一方で、アンダークラスと呼ばれる最貧困層の置かれた状況は深刻である。白人家庭や企業が郊外に移り、大都市中心部のゲットーに取り残された彼らは、犯罪と麻薬が蔓延する劣悪な環境のなかで職もなく、生活保護に依存して生きている。母子家庭で育つ子どもたちに生き方を示す役割モデルはギャングのほかには見当たらず、早い段階で学校からドロップアウトしてしまう彼らの行く末は犯罪に手を染めるか仲間内の喧嘩で命を落とすか、せいぜいよくても親世代の貧困が再生産されるだけである。

このようなアンダークラスの荒廃に対し、その原因を産業構造の変化のような構造的要因ではなく、黒人の努力不足に求めたり、さらには彼らの生得的劣等性に帰する極端な見解も目立つようになり、それとともにアファーマティヴ・アクションや福祉政策を黒人を甘やかし彼らの自立を妨げるものとして、その撤廃や削減を求める動きも始まっている。

ロス暴動やO・J・シンプソン裁判のような九〇年代の諸事件とそれへの反応に見られる白人と黒人の距離は、六〇年代後半に全米中の都市で頻発した人種暴動についての報告書のなかで「わが国は、一方は黒人の、他方は白人の二つの社会―分離し、不平等な二つの社会―に向かって進みつつある」[1]と結論された事態が固定化し、深化したことを物語っている。キング牧師が夢見た黒人と白人の統合が実現に向かいつつあるとはとうていいえない。

このような中で統合の理念とは相対立するものとされてきたブラック・ナショナリズムの高まりが指摘されるようになっている。今日最も有力なブラック・ナショナリスト団体であるネーション・

オブ・イスラム（the Nation of Islam）の指導者ファラカンらが呼びかけた一九九五年の「ミリオン・マン・マーチ」に数十万の黒人男性が集まったことは記憶に新しいし、文化のヨーロッパ中心主義に対抗するアフリカ中心主義（Afrocentrism）の主張も顕著である。

ブラック・ナショナリズムは黒人と白人の分裂を促進するものとして否定的に見られることが多かったし、今日でもそうであるが、これはブラック・ナショナリズムの概念のあいまいさ、複雑さに由来する誤解に基づく面が多分にある。ブラック・ナショナリズムはかならずしも分離主義やアフリカ中心主義、政治的急進主義を意味するわけではなく、統合の否定でさえもない。本稿はブラック・ナショナリズムの研究史をたどりつつ、ブラック・ナショナリズムの概念と黒人史上におけるその具体的展開について再検討した上で、黒人問題はもはや人種問題ではなく階級問題であるといわれる現在、黒人の現状打開にブラック・ナショナリズムが貢献する余地はあるのかという問題を考えてみたい。

二

ブラック・ナショナリズムはこれまでさまざまに定義されてきたが、ナショナリズムそのものの分析や定義が困難であるというアンダーソンの指摘[2]は、ブラック・ナショナリズムの場合にもあてはまる。ドレイパーはブラック・ナショナリズムが何であるかを知るよりもブラック・ナショナリストになる方が「はるかに容易」であると述べている[3]。

たとえばエシエン－ウドムはブラック・ナショナリズムを「祖国を所有しているかまたはするべきであり、また言語、文化、宗教の共通の遺産を分け持っているかまたは分け持つべきであり、その遺産、生活様式、エスニック・アイデンティティは他の集団のそれとは異なっているとする集団の信念[4]」と説明している。またモーズィズは一九二〇年代以前のブラック・ナショナリズムに関してウドムのいう「祖国」の所有、すなわち領土的分離主義（territorial separatism）を不可欠の要素として重視する一方、スタッキーは領土的分離主義をはずして代わりに共通の文化的経験に由来する集団のアイデンティティを強調する[5]。ブラック・ナショナリズムは黒人がアフリカからアメリカに連れてこられた一七世紀から現代にいたるまでの長期間にきわめて多様な形をとって現れてきたので、そのすべてを包括するような定義となると人種の団結といったようなきわめてあいまいなものになってしまう。このような考えに異議を唱える黒人指導者は歴史上ほとんど見当たらず、これではブラック・ナショナリズムとそうでないものとの境界線は不明確になる。

モーズィズは一八世紀から一九世紀半ばのピークを経て第一次大戦後のマーカス・ガーヴィーのアフリカ帰還運動までを「古典的ブラック・ナショナリズム」と呼び、それ以降の「現代的ブラック・ナショナリズム」と区別している[6]。後述するようにこの区分にあて

はまらないケースも存在するが、多くの研究者がこの区分をだいたいにおいて受け入れている。古典的ナショナリズムが概して領土的分離主義＝移民運動と同一視されるのに対して、現代的ナショナリズムはいくつかの類型に分類されることが多い。たとえばピンクニーは、これを「文化的」「教育的」「宗教的」「革命的」の四つの類型に分け、ヴァンデバーグの場合は「領土的」「革命的」「文化的」の三つに分けている。(7)

ブラック・ナショナリズム研究は一九六〇年代～七〇年代のブラック・ナショナリズムの復活とともに盛んになったといえる。マルコムXの影響によって都市の黒人コミュニティを中心に高まっていたブラック・ナショナリズムの傾向が、ブラック・パワーの時代を迎えて全面的に開花する。公民権法の成立後も依然として残る経済的差別や白人の暴力のために統合主義への疑念が強まるとともに、それまで主流としての統合主義の陰になっていたブラック・ナショナリズムの伝統に光が当てられるようになった。そして分離主義や独自の黒人文化の主張のようなラディカルな側面がブラック・ナショナリズムの概念として定着した。そうした中で、マーティン・R・デレイニをはじめとする一九世紀の黒人移民運動が、敗北主義や逃避主義に基づくネガティヴなものではなく、ブラック・ナショナリズムに基づく積極的な意味をもったものとして見直されるようになる。また融和主義的で黒人の公民権の主張に消極的だとされていたブッカー・T・ワシントンも、その自助（self-help）哲学がブラック・ナショナリズムの伝統との関連で捉えられるようになり、極端な人種主義に立つガーヴィーの運動も再評価されるようになった。

このような傾向に対し、七〇年代に入ってブラック・ナショナリズムの運動が陰りを見せるようになると、ブラック・ナショナリズムの概念が再検討されるようになる。次にそれを見てみたい。

三

ブラック・ナショナリズムの顕著な特徴の一つに、それが人種的ナショナリズムであることがあげられる。ブラック・ナショナリズムは黒人を個人ではなく人種としてまるごと貶める白人のレイシズムが生み出したものである。自らの苦境の原因を奴隷貿易以来の西欧白人による黒人種の支配と抑圧にあると考えた黒人は、アフリカや西インド諸島の黒人をも過酷な歴史的体験と運命を共有する同胞と考えた。とりわけ一九世紀半ばの移民運動に携わったブラック・ナショナリストたちはアフリカ黒人との強い絆を強調し、後述するように移民の目的の一つにアフリカの文明化をも掲げた。モーズィズは、「古典的ナショナリズムは一九世紀半ばには事実上パン・アフリカニズムと区別できなくなった」と述べている。(8) ナショナリズムがナショナルの枠を超えてインターナショナルな性格を帯びるというブラック・ナショナリズムの逆説的な性格がここに見られる。

しかしながらデレイニをはじめとする古典的ナショナリストは、このようなきわだった人種意識をもち、合衆国のみならずあらゆる地域の黒人の利害の同一性を前提とし、人種的な連帯と団結を主張したにもかかわらず、下層の黒人大衆やアフリカの黒人に向ける彼らの眼差しは白人のそれとほとんど変わるところはなかった。モーズィズは彼らが「奴隷の習俗を賞賛することには関心をもたず、またアフリカ固有の風俗習慣を高く評価することはめったになかった」と述べている。[9] デレイニは召使や乳母のような「卑しい仕事」に甘んじることなく自尊心をもって「向上」しなければならないと黒人大衆を叱咤する一方、アフリカ人にはナイフとフォークを使わせ、きちんとした服装をさせることによって「文明生活の習慣を刻み込む」必要があると考えていた。[10] 彼らは強い黒人意識をもちながら、実際には西欧白人ブルジョア文化の価値観を信奉しており、アフリカへの合衆国黒人の移民によって合衆国の黒人の救済のみでなく、アフリカのキリスト教化と文明化（＝白人文化の導入）も同時に達成できると考えていた。古典的ブラック・ナショナリズムの指導者たちは「例外なく人種の向上と『文明化』にとりつかれていた」。[11]

このことと関連してブラック・ナショナリズムの構成要素の一つである自助の思想も再検討されることになった。一九世紀のブラック・ナショナリストたちは白人への依存的態度を捨て、黒人自身の自助努力によって向上をはかることを訴えた。黒人エリート層に属する彼らは、白人の人種的偏見がなくならないのは黒人の能力に対する彼らの無知と誤解のゆえであり、黒人が白人に劣らない能力の持ち主であることを実際の行動で証明すれば白人社会に受け入れられるであろうという楽観的な考えをもっていた。しかし合衆国内では彼らの実力を発揮する「場」さえ与えられない。彼らの移民運動はそのような「場」を国外に確保しようとしたものであった。[12]

しかしながら黒人の能力を白人に認めさせるためには白人の価値観に基づいて振舞う必要がある。それは黒人もしくはアフリカに固有の文化を否定する方向へと向かう一方で、結果的に白人の期待する黒人像—彼らの役に立つ黒人を目指すことへと容易に転化する危険をはらんでいた。自助思想のこのような側面は、黒人以上に白人からの支持を得たワシントンのタスキーギ運動に明らかである。白人の価値観に基づいた自助思想は、かくして黒人を差別する社会そのものの批判に向かうよりも、そのような社会への適応へとつながっていく。

ゲインズは一九世紀末以来黒人に対する人種的抑圧が強まる中で、本来黒人にとって「解放の神学」であったはずの自助を中心概念とする「人種の向上」が、黒人エリート層の手によって異なる意味を帯びるようになったことを指摘している。すなわち彼らは固定した人種的相違を文化的同化の程度の差に置き換え、白人中産階級の道徳観に基づく人種内でのヒエラルキーの頂点に自分たちを位置づけることによって「冷淡な白人が気持ちを和らげ、中産階級のアフリカ系アメリカ人の人間性や…市民権の可能性を認めることを期待」

したというのである。[13] 黒人内の階層分化がしだいに進行していく中で、自助努力によって向上していく黒人とそうでない黒人の間に線を引くことによって、「人種の団結」とはまったく逆の事態がもたらされることになる。

ブラック・ナショナリズムの重要な構成要素である自助思想のこのような矛盾は、古典的ブラック・ナショナリズムの時代に特有のものではない。次にそのことを見てみたい。

四

現在最大の勢力を誇っているブラック・ナショナリストの団体が黒人イスラム教組織のネーション・オブ・イスラム（以下、NOIと略記）である。一九三〇年代のはじめ、W・D・ファードによって設立されたNOIは、継承者のイライジャ・ムハマドの下で五〇年代に組織を拡大し、全米各地に寺院を建設していく。NOIは大都市のスラム地区で積極的な布教活動を展開し、とりわけ麻薬やアルコールの中毒患者や売春婦、売春斡旋者、さらには刑務所の服役者を含む黒人社会の最下層の人々に働きかけ、かれらの「更正」に実績をあげた。ムハマドの下で組織のスポークスマンとして勢力拡大の立役者となったマルコムXも服役中に勧誘された一人である。

NOIは白人を悪魔と呼び、彼らからの完全な分離を主張する。経済的にも自立を目指し、農場や工場、店舗などを幅広く経営し、積極的な経済活動を行っている。信徒は礼拝のほか、禁酒・禁煙、食物の種類に関する制限、身体や身の回りの清潔維持等の厳格な規律に従うことが要求される。[14]

オグバーは年代的には現代的ナショナリズムに属するはずのNOIが、むしろモーズィズのいう古典的なブラック・ナショナリズムの類型にあてはまることを指摘している。すなわち南部黒人の伝統的な食物であるソウル・フードを奴隷の食物として否定したり、アフリカの伝統的な服装ではなくスーツの着用を奨励していることに明らかなように、奴隷時代からの伝統に根ざす黒人大衆の固有の文化が否定され、白人中産階級の文化の重要な側面が賞賛されているというのである。オグバーはこれを「古典的ブラック・ナショナリスト組織のエリート主義と民俗文化への敵意の伝統」を継承するものであるという。[15]

オグバーはNOIが貧しい黒人に「希望と救済」を与えたことを認めている。彼らは「犯罪やアルコールや麻薬の常習者を更正させ、国中の何千という黒人に物資やサービスや職や良質の学校を提供した」。しかしながら、白人を非難する口調の激しさにもかかわらず、NOIは白人の権力構造そのものにいどむことはなかった。自助を唱え、政府への依存を否定し、政治への関わり自体を拒否するNOIのビジョンは「現状の擁護者のそれとほとんど変わらな」いとオグバーはいう。[16] 五〇年代から六〇年代にかけてNOIが戦闘的なイメージで見られたのはマルコムXによるところが大きい。そのマル

コムが政治への関与を否定するムハマドの保守的な態度への不満をおもな原因としてNOIを脱退したのは当然のなりゆきであった。

NOIがとりわけ下層の黒人の間に人種的自尊心を喚起した功績を認めつつも、その保守性を指摘する研究者は少なくないが[17]、先に述べたようにNOIのファラカンが中心になって呼びかけた一九九五年の「ミリオン・マン・マーチ」には、六三年の歴史的なワシントン大行進を上回る数の黒人男性が参加したのである。このことをどのように受け止めればよいのか。ブラック・ナショナリズムの担い手の問題とあわせて次に考えてみたい。

五

ブラック・ナショナリズムの解釈の多様性は、その起原と絡む形で担い手や支持層の問題にも顕著である。大雑把にいえば運動のエリート的ないしプチ・ブル的性格を重視する見方と、逆に黒人大衆をその担い手とする見方とに大別される。前者の代表がモーズィズであり、立場は違うがクルーズも含まれる。一方ブラック・ナショナリズムの運動に積極的評価を与えようとする研究者は、ほぼ後者に属する。たとえばピンクニーは自由を求める奴隷の反乱や請願運動に「黒人の団結の最初の集団的表現」を見ており、ブッシュも屋外奴隷の反乱の伝統の延長線上にブラック・ナショナリズムを位置づけている。マラブルは「アフロ＝アメリカ人の歴史を通じて、エリートは圧倒的に統合主義で反ナショナリストであり、これに対して労働者階級と農村の黒人の大半は、よりしばしばナショナリストの思想や運動に動員され、これを支持した」と述べている[18]。しかしガーヴィーのアフリカ帰還運動については、従来は合衆国の黒人史上初めて黒人大衆を大規模に動員した運動という評価が一般的であり、ブッシュは「黒人の知識人や中産階級を引き込むことはできなかった」と断定しているが、これに対してマラブルは「多くの才能豊かな黒人聖職者や法律家、熟練のジャーナリストの援助」がガーヴィーの組織づくりを可能にしたと主張している[19]。現実にはヴァンデバーグがいうように、ブラック・ナショナリズムは時代や階層を超えて黒人社会全般に浸透していたと見るのが妥当であろう[20]。

中條献氏は多様なブラック・ナショナリズムの共通項を「白人中心のアメリカにおいてコロニアルな状況におかれてきた黒人たちが、被抑圧者としての共通の経験から、人種を基盤に結束することで解放を勝ち取る」という点に求めている[21]。ブラック・ナショナリズムを生み出したものが合衆国のレイシズムであることは先に述べたとおりである。ピンクニーが指摘するように、合衆国社会が常に黒人を個人としてでなく集団として扱ってきたために、黒人は「他のアメリカ人とよりも彼らのコミュニティの内部で緊密な絆や関係を発展させることを余儀なくされてきた」[22]。黒人がその時々に置かれた状況により、ブラック・ナショナリズムの現れ方は多様であるが、それがレイシスト社会への有力な対抗手段であったことは確かである。

したがって、レイシズムがなくならないかぎり、ブラック・ナショナリズムも存続していくと考えられる。黒人が個人として評価される社会が現実のものになるまでは、ブラック・ナショナリズムは手段としての有効性を保つだろう。

先に述べたように今日最大のブラック・ナショナリスト組織であるNOIの保守性を批判する声は多い。マラブルは「ミリオン・マン・マーチ」がきわめて多くの黒人に支持されたのは、NOIの路線に対する支持というより黒人が今日置かれている状況に対して抱いている危機感のゆえであると述べている。[23] それはそのとおりであるが、政治的イデオロギーを理由としてこの出来事の意味を軽視するのは誤りであろう。イデオロギーの相違を超えて黒人が人種的に団結し、今日自分たちを取り巻く状況にノーということが必要であり、有効であると彼らが判断したということではないのか。それは小異を捨てて団結することができず、主導権争いを繰り広げてきた黒人組織や指導者たちへの痛烈な批判でもあろう。

六

現在合衆国の黒人にとって最も深刻な問題はアンダークラスの危機的な状況と彼らのコミュニティの機能不全—あるいは崩壊—であろう。このコミュニティの再生のために、人種的団結を訴え自助を主張するブラック・ナショナリズムは確かに有効に作用しうる。だがその場合に、黒人の苦境の責任を黒人自身のみに帰し、その解決をもっぱら彼らの自助努力に求めることは誤りであろう。産業構造の変化や経済のグローバル化といった幅広いコンテクストにおいて黒人の問題を捉える必要がある。そしてそのことによって他のマイノリティとの共通性や連帯の可能性も見えてくるだろう。

このような方向で考えるとき、一九六〇年代後半から七〇年代前半にかけて西海岸を中心に都市の多くの黒人の心を捉えたブラック・パンサー党のあり方が示唆を与えてくれる。パンサーは一九六七年、カリフォルニア州オークランドでボビー・シールとヒューイ・ニュートンによって創設された黒人組織であるが、自衛のために武装したことから過激なイメージが広まり、合衆国史上最も激しかったといわれる弾圧を受けた。パンサーをブラック・ナショナリストの範疇に入れることには議論の余地があるだろうが、多くの研究者が彼らを「革命的ナショナリスト」に分類している。パンサーは資本主義の打倒を唱え、第三世界の人々と連帯しつつ黒人の「ルンペンプロレタリアート」を前衛とする社会主義革命を実現することをめざした組織であった。

武装革命組織というイメージの強いパンサーであったが、彼らは同時に強いコミュニティー志向をもっていた。すなわち、革命が差し迫った状況ではないことをふまえて、当面は日々抑圧にさらされている黒人の生活防衛のための「生存計画」(survival program) に活動の力点をおいたのである。彼らはコミュニティの住民の希望を

調査し、彼らが必要とするものを提供しようとした。その中には子どものための朝食サービス、衣料の提供、法律相談、医療サービス、学校の開設、警官の不法行為を監視するためのパトロール等が含まれる。[24]

パンサーの特徴はその柔軟性にある。彼らはマルクス・レーニン主義に立脚しつつもこれを修正し、毛沢東、フランツ・ファノン、ホー・チ・ミン、マルコムX、ゲバラ等の思想を自由に援用して自らの理論を構築した。彼らは階級と人種のどちらも重視した。ヴァンデバーグは「…パンサーは階級意識と黒人の自治の概念が互いを排除しあう必要がないことを明らかにした。黒人の自決の倫理は人種を超えた左翼の連合の枠内においてさえ存在しつづけることができた」と述べている。[25] 黒人はその置かれた状況から左翼運動の有力な支持層になる可能性をもちながら、現実には合衆国共産党の例に見られるように、過去において左翼の運動が黒人から大きな支持を得ることは困難であった。それは合衆国の黒人が置かれている特殊な状況を理解せず、硬直したドグマによって黒人問題に対処しようとしていると考えられたからであった。アメリカ共産党に「断固として、かつ激しく反対」すると述べたデュボイスはその一人である。[26] パンサーはイデオロギー的整合性よりも黒人の現実を重視し、変化を恐れず、柔軟に対応しようとした。

パンサーは選挙政治も否定しなかった。むしろ黒人コミュニティのエンパワーメントのために有権者登録の推進に力を入れ、パンサーのメンバー自らが地方レベルの選挙に立候補することもあった。選挙政治におけるブラック・ナショナリズムの影響力は近年しだいに重視されるようになっている。ジェニングスはウォルトンの著作を引用しながら「ニューアーク（ニュージャージー州）の前市長ケネス・ギブスン、シカゴの前市長故ハロルド・ワシントンのような黒人政治家を誕生させた選挙」や「黒人の抗議行動やロビー活動、学校や住宅局へのコミュニティー統制をめぐる紛争、最近では一九八四年、八八年のジェシー・ジャクソンの大統領選挙運動」でブラック・ナショナリズムが役割を果たしてきたことを指摘している。[27]

ブラック・ナショナリズムが黒人にとって現状への不満の表明以上の有効な手段となるためには、何よりもまず、コミュニティを基盤にし、その住民のニーズに応えるものでなければならないであろう。コミュニティのエンパワーメントのためには選挙政治は有力な武器となりうるが、たんにパイの分け前を増やすことを目指すのではなく、インターナショナルな視野に立って黒人の置かれている状況を構造的に把握し、望ましい社会の実現を目指す姿勢が必要であろう。それはおのずと人種か階級かの二者択一ではなく、その絡み合ったものとして黒人問題を把握することにつながる。そのときブラック・ナショナリズムはその偏狭さを克服して真に有効な手段となるであろう。

註

(1) *Report of the National Advisory Commission on Civil Disorders* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1968), in Albert P. Blaustein and Robert L. Zangrando, eds., *Civil Rights and African Americans: A Documentary History* (Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 1991), p.619.

(2) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London: Verso, 1983), 白石隆・白石さや訳『想像の共同体』（リブロポート、一九八七年）一一頁。

(3) Cited in William L. Van Deburg, *New Day in Babylon: The Black Power Movement and American Culture, 1965–1975* (Chicago: University of Chicago Press, 1992), p.130.

(4) E. U. Essien-Udom, *Black Nationalism: A Search for Identity in America* (Chicago: University of Chicago Press, 1962), p.20.

(5) Wilson J. Moses, *The Wing of Ethiopia: Studies in African-American Life and Letters* (Ames: Iowa State University Press, 1990), p.159; Sterling Stuckey, *Slave Culture: Nationalist Theory and the Foundations of Black America* (Oxford: Oxford University Press, 1987), p.viii. なお、ブラック・ナショナリズムのさまざまな定義については、Alphonso Pinkney, *Red, Black, and Green: Black Nationalism in the United States* (New York: Cambridge University Press, 1976), pp.4–6.

(6) Wilson J. Moses, ed., *Classical Black Nationalism: From the American Revolution to Marcus Garvey* (New York: New York University Press, 1996), p.1.

(7) Pinkney, *op.cit.*, p.13; Van Deburg, *op.cit.*, pp.132ff.

(8) Wilson J. Moses, "Pan-Africanism," Jack Salzman, David Lionel Smith, Cornel West, eds., *Encyclopedia of African-American Culture and History,* Vol. 4 (New York: Simon & Schuster Macmillan, 1996), p.2094.

(9) Moses, *Classical Black Nationalism,* p.20.

(10) Martin R. Delany, *The Condition, Elevation, Emigration, and Destiny of the Colored People of the United States. Politically Considered* (Philadelphia, 1852, reprint., New York: Arno, 1968), pp.197–198, p.204; "Official Report of the Niger Valley Exploring Party," Howard H. Bell, ed., *Search for a Place: Black Nationalism and Africa, 1860* (Ann Arbor, Mich.: The University of Michigan Press, 1971), pp.105–106.

(11) Moses, *Classical Black Nationalism,* p.20.

(12) デレイニの移民運動については、竹本友子「マーティン・R・デレイニと一八五〇年代の黒人移民運動」『早稲田大学文学研究科紀要　別冊第九集』（一九八二年）三九三頁―四〇二頁、同「マーティン・R・デレイニのアフリカ移民運動―アンテベラム期ブラック・ナショナリズムの研究―」『西洋史学』第一五六号（一九九〇年）、一八―三五頁。

(13) Kevin K. Gaines, *Uplifting the Race: Black Leadership, Politics, and Culture in the Twentieth Century* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1996), pp.2, 3, 75.

(14) Pinkney, *op.cit.*, pp.155–164.

(15) Jeffrey Ogbonna Green Ogbar, "From the Bottom Up: Popular Black Reactions to the Nation of Islam and the Black Panther Party, 1955–1975," (Ph.D. Diss., Indiana University, 1997), pp.81, 92, 22.

(16) *Ibid.*, pp.286, 295.

(17) たとえば Manning Marable, "Louis Farrakhan and the Million Man March," *New Statesman and Society* (October 27, 1995), in Marable, *Speaking Truth to Power: Essays on Race, Resistance, and Radicalism* (Boulder: Westview Press, 1996), pp.139–145; Adolph Reed Jr., "False Prophet-I　The Rise of Louis Farrakhan," *The Nation* (January 21, 1991), pp.1–56; "False Prophet-II　All for One and None for All," *Ibid.* (January 28, 1991), pp.86–92. も参照。

(18) Rod Bush, *We are Not What We Seem: Black Nationalism and Class Struggle in the American Century* (New York: New York University Press, 1999), p.120; Pinkney, *op.cit.*, p.16; Bush, *op.cit.*, pp.236-237; Manning Marable, "Black Nationalism in the 1970s: Through the Prism of Race and Class," *Socialist Review* 10: 2-3 (March-June 1980), p.62.

(19) Bush, *op.cit.*, p.101; Manning Marable, *Black American Politics: From the Washington Marches to Jesse Jackson* (London: Verso, 1985), p.64.

(20) William J. Van Deburg, ed., *Modern Black Nationalism: From Marcus Garvey to Louis Farrakhan* (New York: New York University Press, 1997), Introduction by Van Deburg, p.6.

(21) 中條献「「アフリカ・ナショナリズム」の現在と黒人の政治文化」『現代思想』（一九九七年、一〇月号）七四頁。

(22) Pinkney, *op.cit.*, p.2.

(23) Marable, "Louis Farrakhan and the Million Man March," pp.141-142.

(24) Pinkney, *op.cit.*, pp.113-115.

(25) Van Deburg, *New Day in Babylon*, p.165.

(26) William E. B. Du Bois to George Streator, April 24, 1935, Herbert Aptheker, ed., *The Correspondence of W. E. B. Du Bois*, Vol. II (Amherst: University of Massachusetts Press, 1976), p.92.

(27) James Jennings, *The Politics of Black Empowerment* (Detroit: Wayne State University Press, 1992), 河田潤一訳『アフリカ・エンパワーメントの政治―アメリカ都市部における黒人行動主義の変容―』（ミネルヴァ書房、一九九八年）七一―七二頁。